無限のナイトメア

高月望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無限のナイトメア

【Ｎコード】
Ｎ７６８３Ｙ

【作者名】
高月望

【あらすじ】
あなたはどんな夢を見ますか――
高原いつきは普通の高校生。そんないつきの前に現れたのは美少女の転校生だった。しかし、それを境に見始める悪夢。その悪夢は学校中に広がりを見せ始める。一体何が起きているのか。転校生の彼女との関わりは。いつきの友達をも巻き込みながら、悪夢の六日間が始まる。※初めて書きます。拙い文章ですが、暇つぶしにでもどうぞ。感想などお待ちしています。

プロローグ

「……見つけた、見つけたぞ」
その声はまるで地の底から聞こえてくるような低く、重い声だった。だが、その声は歓喜に満ち溢れていた。それは長年探していたものが、見つかったかのように。
しかし、私は声の主を見つけることができないでいた。
何故なら、ここは闇しかない真っ暗な空間だったからだ。
私は、そんな闇の中を、あたかも暗い海の中に浮かんでいるような、そんなふわふわした感覚で漂っていた。
「見つけた、見つけたぞ」
「…誰だ……？」
私は声の主に問いかけた。
「私に名はない。しかし、お前にとって救世主となりえるだろう」
「…どういうことだ？」
「どうもこうもない、言葉のままだ。ふふふふふふ」
私は次第に恐怖を抱き始めた。さっきまでのふわふわした気持ちが、だんだんと覚め始めているのを感じる。この声を聞いてはいけないと体が、心が、反応している。しかし、声の主はそんな私に気付いているのかいないのか、さっきよりもまして低く、重い声で、しかも優しく問いかける。
――お前の願いをかなえてやろう…と。
相手の姿は見えないのに、それは耳元でささやかれたような感覚だった。心が揺れているのを感じる。まるでそれは悪魔のささやきだ。声の主が何者なのかもわからないというのに、私はその魅力的な提案に惹かれている。それほど私は欲しているのだろう、自分の

願いがかなえられることを。
「さぁ、望め！望めばその願いかなえよう」
「……はい…」

1－（1）

僕は急いでいた。

なぜ急いでいるかというと簡単なことだ、遅刻しそうだから。朝遅くまで寝ていたせいで、いつもより遅い時間に出る羽目になった。走って学校に向かう。

僕の通う高校は住宅街の中にあり、その利便性と制服のかわいさから人気の学校となっている。大きさは全校生徒六百人というまあまあ大きな学校である。一応、進学校である。

そんな学校への通学路は、鳥のさえずりに加えて、登校する同じ学校の生徒たちの笑い声が聞こえてくる。今日は天気も良く、清々しい朝の日差しが降り注いでいた。

僕は立ち止まり、携帯を出し時間を見る。走ったおかげだろうか、十分に間に合う時間帯だ。僕はホッとし、ゆっくり歩き出した。呼吸を整えながら、朝の空気をいっぱい吸う。清々しい空気が肺に満ちていくのを感じる。差の日差しも春の陽気を含み、温かく気持ちいい。

そんなポカポカ陽気で歩いていると、急に首に重みを感じるではないか。見ると首に誰かの腕が巻きついている。その重みで体がだんだんとのけぞっていく。しかもその腕はだんだんと自分の首を絞めてつけていく。次第に息をするのも苦しくなってきた。このままじゃ死ぬ。身の危険を感じ、

「ギブ、ギブ！」

僕はその腕をたたきながら、必死に降参を訴える。するとその腕はすぐにほどけていった。僕は誰だと思い、首をさすりながら後ろを振り返ると、そこには見知った顔があった。

「驚いた？おはよう、高原いつきくん」

満面の笑みで僕にあいさつしてくれたのは、僕にとって数少ない

女の子の友達である雨宮美雨さんだ。彼女はクラス委員長でもある。しっかり者で誰にでも優しく、平等に扱ってくれる人だ。そのためクラスの人たちからの信頼も厚い。頭もよく、学年トップ。その座を今まで一度も明け渡したことがないそうである。

「歩いていたら、高原くんの後ろ姿が見えたから、つい抱きついちゃった。へへへ」

「…むやみに男の子に抱きついちゃいけません」

「どうして？高原くん、嫌だった？」

「そ、そうじゃないけど…」

「…分かった、これから気をつけるね」

今の会話で分かるように、雨宮さんはちょっと天然なところがある。またそこがかわいいという男子生徒も多くいるらしい。僕もその一人である。

そして僕たちは一緒に学校へと向かうこととなった。横に二人並んで歩いていると少し恥ずかしい気がするのはどうしてだろう。僕が意識しすぎているからなのだろうと思うけど…

「あ、そうだ。高原くんは知っているかな？」

「えっ、な、なにが？」

突然、話を振られて驚く僕。今、自分が考えていたことを思い返し、顔が熱くなるのを感じた。

「あれ、高原くん、顔赤いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ。それで何？」

「あ、えっとね、今日、転校生が来るんだよ」

「今日？急だね」

「そうなの。先生がみんなを驚かしたくて内緒にしたいみたい。だからみんなに言ってないんだけど…私は委員長だから教えてもらってて……あっ！しまった。内緒だから高原くんにも言うのはまずかったのかな？でも、もう言っちゃったし……どうしよう」

おろおろする雨宮さん。そんな姿を見て僕もおろおろしながら答える。

「い、いや別にいいよ。ただ今日の転校生が来るというサプライズがサプライズではなくなったって言うだけだし、大した損害ではないよ。それにみんなが知らないことを知っているという優越感があっていいと思うし」
「ご、ごめんね…」
「あ、謝るようなことじゃないよ」
「で、でも……」
本当に申し訳なさそうに謝る雨宮さんの姿に、僕もどうしていいか分からずにいる。こういう時にちゃんとフォローできる人間になりたいと思うが、今の自分ではそうはいかず、あわてて話題を振ってみる。
「で、転校生って男？女？」
「…話では女の子だよ」
「女の子か……」
「高原くん、何か企んでいる？」
「なにを言いますか。企むことなんてないよ、どっかの誰かさんとは違って」

1―（2）

そうこうしているうちに学校に着いた。
僕たちはそろって二年三組の教室へと向かう。教室の前まで着くと中から楽しそうな話し声が聞こえてくる。僕はドアに手をかけ、開き、二人で教室に入ると、
「おっや～お二人で登校ですか～？」
聞き覚えのある、ふざけた声がした。
「おはよう、龍臣」
「おはよう、いつき」
目の前にいたのは僕の悪友、瀬田龍臣である。茶髪にピアスといういで立ちに、ナンパな性格も相まって、問題児の一人となっている。でも、根はいいやつで一緒にいると楽しい。
「おはよう、雨宮さん。今日もかわいいね。今度一緒にデートでもどう？」
「おはよう、瀬田くん。いつも元気だね」
「もちろん、瀬田龍臣はいつでも元気ですよ～…痛い、なにすんだよ～」
ドヤ顔の龍臣を、僕は一発殴り、席へと向かう。
隣の席には川島明人くんが座っていた。
川島くんは、端正な顔つきと寡黙さが、女子には人気となっている。僕とは席が隣同士ということもあり仲良くなり、ちょくちょく一緒に帰ったりする。
「おはよう、川島くん」
「おはよう」
僕は改めて川島くんの顔を見て、ぎょっとした。その顔には生気がなく、青白く、まるで死人みたいだった。僕は驚き、声をかける。
「だ、大丈夫？川島くん。顔色が悪いんだけど…」

「大丈夫」
「で、でも…」
そこに龍臣もやってきた。
「うわ、川島、大丈夫か？顔色すっごく悪いぞ」
「大丈夫」
「大丈夫じゃねぇよ」
僕は再度、川島くんの顔を見た。その顔は本当に生気がない。周りの人が心配になるぐらい顔色が悪いのだ。
「風邪でもひいた？川島くん」
「いや、…悪い夢を見たんだ……」
「…夢…？」
僕が再びどういうことか尋ねようとしたとき、ちょうど先生が教室に入ってきた。
「こらこら、席に着けよ～」
その声をきっかけに、生徒たちが次々に席に座っていく。僕も仕方がなしに席に座るが、僕の目線は川島くんのほうをちらちらと見つめている。友達だから心配なのだ。
「みんなに大事な話があるぞ～」
先生がうれしそうに話をし始めた。僕は川島くんが心配だったが、仕方なしに視線を先生のほうにむける。
僕の席は後ろから二番目の窓側の席なので、教室内をよく見渡すことができる。みんなまじめに先生のほうを向いて、その話に耳を傾けている。
「ええと、まず一つ目として、新しい保健の先生が赴任してきました。名前は夢野先生です。前の保健の先生だった山田先生が産休に入られたためです。
次に二つ目ですが、これはみんな驚くと思いますが、うちのクラスに今日、転校生がきます」
「ええ～」
みんなが驚きの声を上げる。クラス内がざわめきだった。それを

聞いた先生は、どこか満足げにうなずいていた。先生はこういう反応を待っていたのであろう。すでに知っていた僕は、ただただみんなのことを観察していた。驚き、喜ぶものがほとんどだった。僕は隣の川島くんを見るが、まっすぐ前を向いたままで何の反応もない。やはり顔色は良くなってはおらず、いまだ青白いままであった。

「さぁ、入って」

先生が廊下にいるだろうその転校生を呼び出した。

コツコツコツ……

先生の言葉を受け、転校生が教室に入ってくる。その姿が目に入ったとき、教室のざわめきは一瞬でなくなった。静寂が教室内を包み込んでいく。

誰もがその姿に目を奪われた。

黒く長い絹のような艶やかな髪をなびかせて、みんなの前に立った少女に。

大人っぽい中にまだ少女のあどけなさを残した端正な顔立ち、よく見ると吸い込まれそうな黒く凛とした大きな瞳。姿や雰囲気、すべてが美しかった。制服もまるで、彼女のためにあしらったが如く着こなされていて、ただ素晴らしいの一言だった。

「夢野夢子です。よろしくお願いします」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7683y/

無限のナイトメア

2011年11月23日23時50分発行